

武蔵野日曜聖書講筈 祈祷会

十字架・復活・聖霊

——マタイ伝第27章45〜56節——

1975年6月15日

小池辰雄

なんぞ棄て給いし 義が愛として与えられる 旧約のアウフヘーベン 自分自身がキリストの復活にあずかる 祈り

【マタイ27】

45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。46 三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給う。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。47 そこに立つ者のうち或る人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言う。48 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。49 その他の者ども言う『さて、エリヤ来りて彼を救うや否や、我ら之を見ん』50 イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。51 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震い、磐さけ、52 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おおく活きかえり、53 イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。54 百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『実に彼は神の子なりき』と言えり。55 その処にて遙かに望みいたる多くの女あり、イエスに事えてガリラヤより従い来りし者どもなり。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ及びゼベダイの子らの母などもいたり。

●なんぞ棄て給いし

45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。

ゴルゴタの丘の上に盗賊二人とキリストが十字架につけられている。大変な光景です。キリストのような方が十字架につけられたという大変な歴史的なでき事です。波をも鎮めるキリストですから、やはり、キリストの暗黒の事態に天地そのものがその姿をもって応える。それは本当にそうだと思うんです。

ベートーベンですらも、彼が死ぬ時は、雷雨になった。やはりベートーベンの魂に非常に相応えるような情景になったわけです。藤井先生が死ぬ時は、あれは非常に暑い夏でした。



先生は人生の真昼時に、まだこれからが本当の仕事と思っているときにぶつ仆れていますから。エリヤの如き天翔あまがけらんとするような意気込みがあった。その烈々たる太陽、午後4時45分というんですから、何かやはり、そういった魂と相応あはずるような自然の状況というものがあるわけですね。

46 三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言いつつ、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。

詩篇22篇に「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」とある。

47 そこに立つ者のうち或る人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言つ。

「エリー」と言ったのに、「エリヤを呼ぶ」と思ったわけです。

48 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。49 その他の者ども言う『さて、エリヤ来りて彼を救うや否や、我ら之を見ん』

相変わらず嘲っているわけです。

50 イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。51 視よ、聖所の幕、上より下まで

裂けて二つとなり、また地震い、磐いさけ、52 墓むひらけて、眠りたる聖徒の屍しかばね體

おおく活きかえり、53 イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多

くの人に現れたり。

まあ、大変なことが書いてある。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

と。「見棄てる」という字は、「見棄てる」と言ってもいいけれども、ただ本当に「棄てる」という字です。キリストのこの言葉がもしなかったら、私は、ある意味において、寂しいと思う。

神を信頼しぬぎ、神の義を本当に体現したひと、それは棄てられては絶対にならない。それでなければ、神の義が立たない。神の義が立つためには、キリストはいきなり天界にいくはずなんです。ところが、これが棄てられたのでは、神の義が立たないわけです。イエスと神さまとの関係は本当の義の関係で、キリストは本当に聖意を体現したということが、言葉の一番深い意味において「義ただしい」ということです。その義しい人を、義人を棄てたのですから、神さまの世界にはもう義がなくなってしまうわけですよ。

「なんぞ棄て給いし」

とは、言い換えれば、

「あなたの義がなくなっているのですか」

ということなんです。小さな意味における自己主張をしているのではない。いわゆる自己義認じぎにんをしているのでもない。

「なんぞ我を善いと云うか」



と言ったキリストですから、自分のことを自己義認していないことは明らかです。けれども、「あなたにかくも信頼しぬいたこの私をお棄てになるんですか」

と。これは神さまに対する非常な積極的な抗弁とともに、

「この義が棄てられたのでは天地の大黒柱が倒れてしまう」

ということ、そういう意味で、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

ということはどうしても叫ばなければならぬことである。これは一番厳かな義の怒りの言葉です。

「不義なるものがのさばり、義人が倒れるとはどういうことか」

と。これはエレミヤの問いの中にもある。

「^{まち}汝等エルサレムの邑をめぐりて視かつ察りその街を尋ねよ、汝等もし一人の公義を行^{まこと}い真理を求むる者に逢わば、われ之（エルサレム）を赦すべし。」（エレミヤ5:1）

と。それくらいに、一人の義というものが全市民に匹敵する、それだけの力をもった、重^{おも}要性をもったものです。

●義が愛として与えられる

そういうわけで、私は初めは、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

という、その気持がよく分からなかったけれども、この言葉があつてこそ神の子であるということを思っている。この言葉があつてこそ、本当に神の義は叫ばれたのだと。これは神の義の主張なんです。キリストは、

「自分はかくも信頼した」

というのは、

「神さまの義が立った」

ということ、

「本願が成就されたというのに、その本願成就をなぜ棄てるか」

ということ、だから、これは天地を貫く大黒柱の叫びなんです。神さまはキリストに、

「私はお前を棄てない。棄てないけれども、この十字架にかけたのは、義が本当に立つためだ」

と。今度は、逆説になる。

「義が本当に立つためにお前を棄てた」

と。それはどういうことかということ、

「お前の義を人に与えるためだ」



ということですが。

「十字架によつて贖罪する」

というのは、十字架にかけられるのは本当は我々人間です。我々人間がその罪の価を背負つて十字架にかけられなければならなかつたのに、キリストが十字架にかかつたということとは、

「キリストの義を与える」

ということですが。棄てて、どこに棄てたかというのと、我々の中に神さまはキリストの義を下さつた。

「お前の義を人にやるためにお前を棄てたんだ」

ということですが。

だから、棄てられたことは、同時に神の義が現れ、神の義が愛として与えられる。

「義が愛として与えられる」

という、この義と愛とが離れることのできない関係なんです。

「キリストの義というのは聖意を体現した」

ということですが、これは聖霊の世界ですから。

「この義が与えられるということは同時に、聖霊が与えられることと離すことがで

きない。我々の罪が審かれて、この義が与えられる」

ということになる。

「我々の義のためにキリストは甦つた」

という言葉があるでしょ。「我々の義のためにキリストは甦つた」というのは、その義を与えるときには、ではどうやって与えるかというのと、復活の生命をもつて与える。復活の生命とは何か。それは聖霊のことになる。だから、

「十字架と復活と聖霊（ペンテコステ）は離すことができない」

というのはその意味なんです。

●旧約のアウトプハーベン

48 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦に

つけてイエスに飲ましむ。49 その他の者ども言う『さて、エリヤ来りて彼を

救うや否や、我ら之を見ん』

血が流れますから、喉が渇くわけです。そこで酸っぱい葡萄酒を含ませて飲ましめた。キリストはこれを受けとらなかつた。

50 イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。

と。これはガラニ式な異言的なものです、異言の叫びです。異言の叫びで、もう言葉にならない。「大声にて」というんですから、最後の断末魔の大声の叫びです。その異言の大き



な叫びというものは何だか分からない。とにかく、そうしたらば、

51 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、

これは旧約のアウフヘーベン（止揚）、旧約の宗教がここで完了したという意味です。

また地震い、磐さけ、

これは霊震だよ。霊が震えたから、地が震え、磐が裂けた。

52 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おおく活きかえり、

大変なことです。キリストの実存というものがいかに神の力をそのまま受けとっていたかということがこういう事態でよくわかる。

53 イエスの復活のち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。

と。屍體が生き返ってしまったというから大変なことです。この屍はもちろんまた死んだです。けれども、あるときに屍が甦るほどに、キリストが本当に生命をそこに与えてくださる。

旧約宗教は、彼がその羔羊となつて完全に贖いとつたから、もう要らない。だから、聖所の幕が二つに裂けてしまった。即ち、モーセの律法の入っている至聖所と聖所の間の幕が裂けてしまったということは、旧約はこれでお終いということ、これから本当に新約のキリストの霊によつて生きる。ユダヤ人がこれを受けとらないから、困つたもんだ。地が震う前に天に震つている。

54 百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『実に彼は神の子なりき』と言えり。55 その処にて遙かに

望みいたる多くの女あり、イエスに事えてガリラヤより従い来りし者どもな

り。56 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ及びゼ

ベダイの子らの母などもいたり。

「マグダラのマリヤ」というのが一番先によく出てくる。よほどこれはやつかないな女性だったとみえる。しかし、それがひっくり返されて、本当にキリストに救われた。だから、またキリストを非常に慕つたわけです。

まあ、マタイ伝27章は、マルコ伝もルカ伝もヨハネ伝も、十字架のキリストというところは、私たちが解説なんかできるところではない。深く読んで瞑想して——律法の世界を福音の世界で乗り越えた、切り替えたところの事態がこの十字架ですから——何度言つても尽きないところです。

● 自分自身がキリストの復活にあずかる

弟子たちは、キリストが甦るまでは、もう失望落胆、

「どうとう、我々の先生は十字架にかけられてしまったか」

というわけです。女の方は、墓場に行つて香料を屍に塗ろうと考えて、その時を迎えよう



としたんですが、ところが、三日目はキリストの復活ということになる。

我々はこの十字架だけでお終いになるわけにはいけないので、今日はその復活の方はやみませんけれども、必ず十字架のあとにはキリストの復活、霊体として勝利して顕れたこの事態がある。それではじめて福音ですから。

それでもまだ足りない。

「キリストが甦った」

と言ったただ喜んだってしょうがないので、今度は、自分自身がキリストの復活にあずか
らなければならぬ。十字架で死んで、空っぽにされて——キリストの復活の喜びにあず
かるにはどうしたらいいか、これはもうペンテコステです——聖霊に満たされる。これは
聖霊が臨んでこないかぎり、喜びに与かるということが空言になってしまう。復活の音信
はなるほど耳に聞いて結構な音信です。だから、音信を聞いただけで、何か甦ったような
気持ちがあったってわるくはないけれども、しかし、

「本当に自分は死んでも死なないものに甦りました」

という信仰告白ができるためには、これは聖霊を受けなければダメです。それで、聖霊と
いうことが一番大事なことになるわけです。我々は時々ひとりで十字架のところは深く瞑
想しながら読むことです。それで決定的に私たちが砕けをいただく。それも力みではない。

「いつも自分は問題なくキリストで砕かれています。だから、生命は来ざるを得ま
せん」

と、そこへ持っていかななくてはダメです。そうすると、

「**なんぞ我を棄て給いし**」

というキリストの義の、義憤の、怒りの御言の本当の味わいというものがでてくる。

我々人間はキリストのように完璧に義人でありえませんが、「なんぞ我を棄て給いし」
とキリストの角度からは言えない。けれども、御霊の世界に入ると、今度はある意味にお
いて、この響きも我々の響きとなってくる。もう結局、聖書は、聖書のキリスト、使徒たち、
預言者たち、そういった者の次元に自分を本当に入れてくれる。

「ああ、これはわが告白だ」

と言って、本当に自分の中に消化してしまう。

「聖書の文字と自分は一つである」

というような読み方にだんだんなっていくなくてはダメなわけです。

我々の信仰は十字架が土台であることは、普通の教会でもそれを言いますけれども、

「十字架の土台がいかにして本ものであるか」

ということとは、

「復活と聖霊を本当に受けているか」

ということによって実証される。また、復活と聖霊を本当に受けていれば、十字架の土台



はいよいよ深くなっていく。このことにおいて、おそらく普通のキリスト教会はどんなもんでしょかね。だいたい私は疑問に思いますけれども。

● 祈り

祈ります。

主さま、私たちの、ここにいる者またいない者、みなそれぞれいろいろな現実にあります。いろんなことで行き詰まったり、苦しんだり、嘆いたり、気がふさいだり、いろいろな状態がありますが、私たちはどのような時にも本当に十字架のあなたに立ち返って、あなたが本当に

「彼らの罪を赦せ」

と父に願い給うたところの事態に耳を傾けますときに、私たちはどのような問題がありましようとも、すっかりそれらのことがあなたと共に十字架されていることを深く深く瞑想をもって受けとるところに、あなたの十字架を本当に受けとる事態があると思っております。あなたの十字架に沈黙をもって立ち向かい、静かに深く、一切はあなたがしてください。

あなたが、

「過去も現在も未来も、私は全部、引き受けた」

と言う、あなたの御引受け給いしこの十字架の担いは、これから外れるいかなることもありません。あなたの十字架の驚くべき担いを私たちはしっかりと深く受けとり、十字架によつて担われ、私たちもまた根源的には十字架されて、

「もはやわれ生くるにあらず」

とパウロが言いましたところの事態が私たちの一番根底にあります。

「しかし、あなたが生き給う。御霊のあなたは私たちの中で生き給う」

ということを受けとって、聖意を体現し、聖力をいただき、聖光に浴し、ご愛を私たちのハートとします。そして、本当に新しく、力強く、あなたの有^{もの}、あなたに属^つける者という、即主という事態に一人びとりがいかなる時にも瞑想し祈りかかれば入れるという、この絶対ご恩寵をいよいよ受けとります。

「なんぞ棄て給いし」

というあなたの御言の中に、

「わが義をなんじに与う」

という、このあなたの義をいただくがゆえに感謝であります。そこに深い深い愛があります。この地上はどのようなことがありますても、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

とは、正にこの十字架・復活・聖霊のあなたが私たちに仰ることの事態であることを信じ



ます。どうぞ、そのようにして、新しき力と本当の黄金中道を闊歩するところの事態を、私たちはいよいよ身につけていくことができますように願ひ奉ります。

今日は、創世記の最後まで来ましたが、ヨセフが本当にキリストの予表のごとくして、あのゴセンの地においてイスラエル民族のためにありました。イスラエルとエジプトはヨセフにおいて一つにされていきました。ところが、現代は、イスラエルとエジプトは相変わらず戦っています。この創世記の歴史を思つて彼らは立ち返るべきではないかと思ひます。神をぬきにしては、一切のことは解決しません。主さま、あなたと神さまに立ち帰るときには、一切のことは真に解決をみることに、火を見るより明らかです。

私たちはたくさんの方々がいました。しかし、失いました。けれども、僕は悲しみません。どうぞ、彼らがそれぞれのところにおいて本当に福音の世界に、

「ああ、これが本当に福音だ」

と喜んでくれれば、それでいいんです。どうぞ、いかなる人も、神さま、あなたの御許に呼び寄せ、そして本当の福音の喜びを——使徒ペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブの事態が何と慕わしいか。キリスト者たちが本当にもはや宗派的な、何々宗派でもカトリックでもプロテスタントでもありません——キリストにすべてが立ち返つて、相対的な現実の奥に本当の絶対の現実を受けとつていくことができますように、おん導きください。

この兄弟姉妹たちと共に一番深い世界にいよいよ私たちを入れてくださつて感謝であります。どうぞ、いよいよ瞑想より瞑想へ、祈りより祈りへと——パウロは「第三の天」にまでも上げられました——一人びとりにとつて、ある時にのつぴきならない恩寵をもつてあなたが迫つてくださるよう願ひ奉ります。今、いろいろな問題も全部、この十字架・復活・聖霊の角度から受けとり、この福音の事実をもつて解決していくことができますように。かくして、あなたといよいよ親しく、あなたといよいよ一つになつていくことを、あらゆる事態を通して体験していくことができますようにおん導きください。

今日はまた、創世記が一応終わつて、僕も本当に御名を讃えておりますが、どうぞ、来たるべき29日には創世記の総括をし、また兄弟姉妹たちと共にこの半年の「恩寵を感謝し、そしてまた新しく希望をもつて進んでいくことができますように願ひ奉ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に捧げ奉ります。アーメン

